

壊れゆく“若者たち”

『File.47 デジタル症候群～若者の物忘れは「スマホ認知症」』

文 石井 通明 text by Michiaki Ishii

スマホという言葉は、もはや当たり前になっていきます。電車の中でも「スマホ片手に」、外を歩いているだけでも「スマホ片手に」という世の中になっていきます。そんな折、「スマホ認知症」という言葉もテレビや出版本で取り上げられるようになりました。これは若者にみられる「物忘れ」の傾向を示しており、正式な病名ではありません。これは「スマホ依存症」に連動している内容に見られ、何らかの警鐘を示しているものに変わりはありません。

スマホ認知症の内容としては、絶えずスマホを見ていることから脳への大量の情報インプットが行われ、脳が過労状態になり、感情コントロールが生まれず物忘れが頻発するなどの認知症と同じ症状が引き起こされるといわれています。確かにスマホを操作していると、手で欲しい情報が得られるため、考える力や予測する力は徐々に衰えていくとは考えられます。問題視されるべきは膨れ上がる情報社会の傾向です。インターネット上の世界的なトラフィック量は2020年には年間約40ゼタバイトに膨れ上がると言われています。40ゼタバイトがどのくらいの情報量かというと「40ゼタバイト＝400億テラバイト＝40兆ギガバイト（40GB）」になります。1ゼタバイトでも

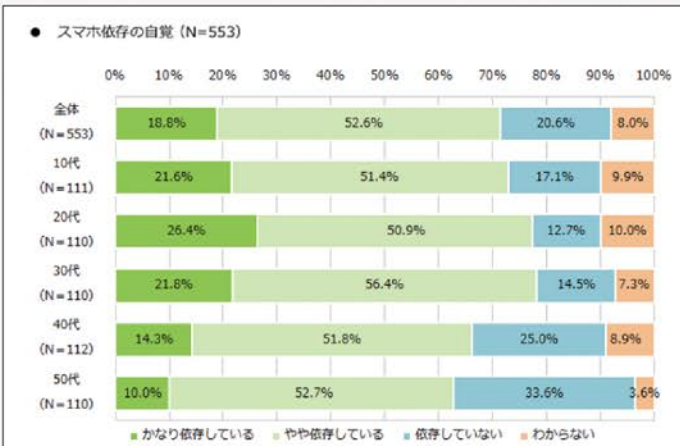


Profile
 東京都大田区生まれ。
 英国ウエールズ大学MBA（経営管理修士）。
 日本交渉学会会員。ハーバード流交渉学・消費者行動心理学・コンフリクトマネジメントを研究。日本コーンセンター協会情報調査委員。
 ㈱グッドクロス取締役COO
 長年コーンセンター運営に携わり、人と人のコミュニケーションについての研究を進めている。思いやりのコーンセンターを展開。
 beccall1031642012088
<http://www.beall.jp/>

「世界中に存在する砂浜の『砂の数』』と言われていますが、これを考えるととても少ない数字です。

しかし、このスマホ環境は、今後、さらに媒体を変えて進化していくと考えられます。具体例で言えば、ウェアラブルメガネとウェアラブル時計をする人たちが街中で見られるようになります。スマホ端末すら持たず不気味なゴーグルを掛けた人たちによるSFのような未来が訪れると予想されます。この時、人間の脳の情報処理は確実に追いつきません。そして情報操作も容易です。今後はAIが自分に適切な情報を与えてくれるようになっていくでしょう。これは逆に言えば、AIによって自分がどのように考えて、どのように行動したらよいかを導くようになるという失うこと、ヒトは自分で考える力を失うということ、AIの奴隷のようなヒトの未来は、考えるだけでも身

の毛のよだつ思いです。「スマホ認知症」という言葉は未来への警鐘の合図かもしれませぬ。



出典:MMD研究所調べ